

と栄養繁殖体形成に対する効果について濃度を変えて試験した。温室内のガラス水槽とパイレックスの貯蔵びんそれぞれで育てられたクロモについて、1984年9月から1985年4月にかけてその栄養繁殖体の形成の観察を続けた。10<sup>-6</sup> と10<sup>-4</sup> Mの濃度は栄養繁殖体の生産を完全に阻害し、処理を受けた植物からのエチレンの発生は薬品の濃度に比例していた。肉眼的観察によると、薬品処理を受けたクロモの成長は、頂芽優勢に対するサイトカイニンのような作用で著しい分枝形態となることを示した。

○Use of the Ecologen to Study Hydrilla Growth Inhibitors (B. B. Martin and D. F. Martin)

Ecologen という名前の培養実験装置をクロモの培養に使用した。この装置は生物由来の植物病原化学物質 (phytopathic chemicals) や底質からの抽出物質の効果を研究するのに便利である。ユニットは中心の立方体の室とそれにつながる4つの円筒の生育室から成っている。クロモのみ、あるいはクロモと他の生物を一緒に中心の室と透過膜で仕切られた生育室中で培養したものをテストシリーズとし、これと透過膜のかわりにポリエチレンフィルムやガラス板など透過性のないものに換えたコントロールシリーズ (植物病原化学物質などの影響をシャットして純粋培養を行う) とを比較する。この装置のよい点はスクリーニングの速さ、自然環境の再現性、生物同士の相互作用を他の生物由来の透過性物質に限定できることである。問題点は簡単に片づく機械的なものと、生物の、攪はんあるいは装置に使われている物質に対する感受性を含んでおり、この最後の点は解決するのが極めて困難と思われる。

○Growth of Hygrophila and Hydrilla in Flowing Water (G. M. Van Dijk, D. D. Thayer and W. T. Haller)

クロモとハイグロフィラ [訳者注: 日本では帰化しておらず熱帯魚用の水草として売られているキツネノマゴ科の植物] の成長は流水中で育てた場合に増加した。流速を1.8ℓ/分~8.7ℓ/分とした場合にハイグロフィラは止水に比べて3~5倍の増加を起したが、クロモは1.8ℓ/分~5.3ℓ/分の流速で2倍であった。ハイグロフィラは流速に応じて劇的に成長がよくなったが、同時にクロモはストロンを伸ばして競争を開始することになった。

(国井秀伸)

○水草研究会第9回全国集会の御案内

表記の集会在、8月1日(土)~2日(日)に、広島県豊田郡安浦町グリーンピア安浦で行なわれます。同封の案内を御覧の上、ふるって御参加下さい。

○会費納入のお願い

昭和62年度会費(3,000円)を未納の方は早い目に納入していただくようお願いします。

送金先 振替口座 神戸7-13829 水草研究会

○会員移動

<新入会>

[Redacted]

<住所変更>

[Redacted]

<退会>

[Redacted]

○投稿のお願い

水草に関するさまざまな話題をお気軽に御寄稿下さい。原稿は横書き原稿用紙に書き(タイプ、ワープロは可)、図表は本文とは別にして下さい。別刷を必要とする方は、投稿時に部数(50部以上50部単位)をお知らせ下さい(実費著者負担)。

原稿の送り先 〒657 神戸市灘区鶴甲1-2-1  
神戸大学教養部 角野康郎

水草研究会会報 No 27 (1987年3月)

[Bulletin of Water Plant Society, Japan]

発行 水草研究会(神戸市灘区鶴甲1-2-1  
神戸大学教養部生物学教室内)

編集 角野康郎

印刷 中村印刷株式会社

(神戸市灘区友田町3-2-3)